

Le cappelle Bufalini e Carafa: dall'odio dottrinale e culturale tra domenicani e francescani alle rivalità artistiche, Campisano Editore, Rome 2019

15 世紀末にローマで制作された壁画にみられる競合意識

理工学部 外国語・総合教育教室

荒木文果

2019年に美術史の専門書に特化したローマのカンピサーノ社よりイタリア語で刊行された単著をご紹介します。本書は、1480～90年代にローマで制作された3つの壁画—システリーナ礼拝堂壁画、ブファリーニ礼拝堂壁画、カラファ礼拝堂壁画—について多角的に論じたものです。ここでは特に「競合意識」というテーマに光を当てます。

1481年、教皇シクストゥス4世（在位1471-1484）は、自身の名を冠するヴァチカンのシステリーナ礼拝堂をフレスコ画で美しく飾るために4名の画家をローマに招聘し、《モーセ伝》8点と《キリスト伝》8点を描くよう命じました。

画家 vs 画家

これらの画家たちはみな、既に自身の工房を擁する独立した親方としての地位を確立していた面々でした。したがって、その制作現場は共同制作であると同時に、自ずと15世紀末のルネサンス美術を彩る画家たちの競作の舞台としての熱気を帯びることになりました。16世紀の美術史家ヴァザーリが「ポッティチェリ伝」のなかで述べた「サンドロ（ポッティチェリ）は、フィレンツェの画家やその他の市の画家と一緒に競争し、その大勢のなかでも非常な名声を勝ち得た」という言葉は、当時の壁画制作を取り巻く雰囲気や今に伝えています。本書では、様式分析と史料の読解を中心に据えて、ローマに招聘されて共同制作を行った4名の画家たちのなかでもポッティチェリのライバル心が画面上にどのように表れているかを論じました。



【図1】ピエトロ・ペルジーノ
《ペテロへの鍵の授与》



【図2】サンドロ・ポッティチェリ
《モーセへの反逆》

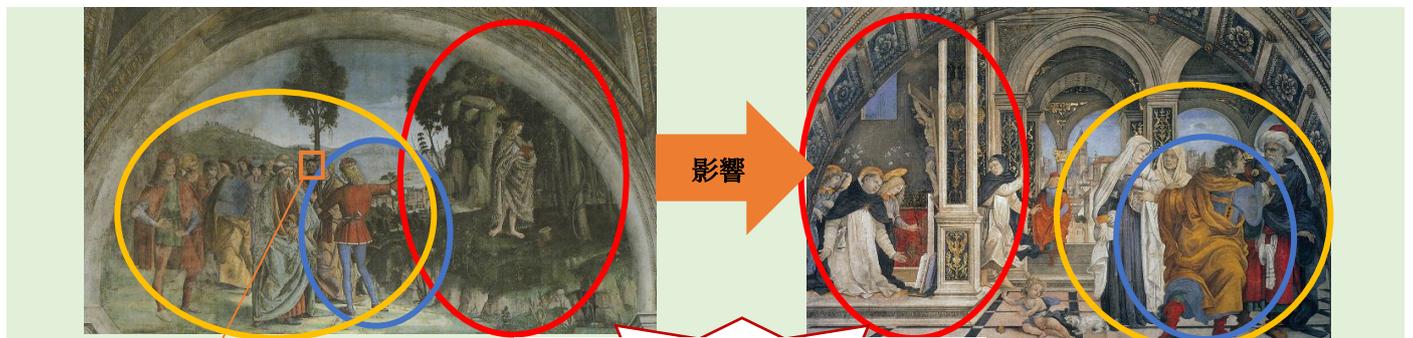
ペルジーノの作品は参加した画家たちの手本でした。しかしポッティチェリだけは、全体の様式の統一性に配慮しつつも芸術家として自意識をもって他の画面との差別化を図ったようです。例えば、ペルジーノは一点透視図法による広い空間表現と落ち着きのある優美な人物像でルネサンス時代の王道ともいえる画面を提示しました【図1】。それに対して、その向かい側の壁に、ポッティチェリは、ペルジーノのが描いた絵画のアンチテーゼともいえる画面を描きます【図2】。背景に広がる空間は建築物によって遮られ、その前に個々の情念を表す激しい身振りを示す人々が登場します。

ルネサンス時代の競合意識は、芸術家間のみにとどまりません。システリーナ礼拝堂壁画制作に影響を受けて1480年代に着手されたブファリーニ礼拝堂壁画とカラファ礼拝堂壁画に関する研究では、これら事業の背後にいたフランチェスコ修道会とドメニコ修道会の間を確認されるライバル心について指摘しました。

※科学研究費「若手研究B 15世紀ローマの壁画装飾にみられる競合意識について」2016～2021年度の研究成果の一部です。また、托鉢修道会の美術への関心は科学研究費「学術変革領域（B）中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」（2020～2022年度）で継続中です。

注文主 vs 注文主

1483年から1486年頃に、ウンブリア地方出身の画家ベルナルド・ピントリッキオは、フランチェスコ会の拠点であったサンタ・マリア・イン・アラチェリ聖堂のブファリーニ礼拝堂の壁画を、1488年から1493年にかけて、フィレンツェの画家フィリッピーノ・リッピは、ドメニコ会の拠点であったサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂のカラファ礼拝堂の壁画を描きました。本書では、両壁画についてローマという場との関わりを重視しながら個別に考察し、それぞれに図像解釈学上の新たな説を提示しました。さらに、両壁画の視覚的な類縁性について検討し、フィリッピーノがカラファ礼拝堂壁画を構想する際に、ブファリーニ礼拝堂壁画を全面的に参照したことを指摘しました。つづいて、両壁画の視覚的な類縁性を画家間の影響関係のみに還元するのではなく、アラチェリ聖堂のフランチェスコ会士とミネルヴァ聖堂のドメニコ会士という、当時のイタリアで勢力を二分していた托鉢修道会同士の競合といった文化的背景の中で捉える考察を試みました。実際に、ブファリーニ礼拝堂壁画には、ドメニコ会士を揶揄するような描写が現れ、カラファ礼拝堂壁画には、その応答であるかのように、ブファリーニ礼拝堂壁画の主演であるフランチェスコ会修道士シエナのベルナルディーノへの非難と読み取れる図像や銘文があるのです。



【図3】ベルナルド・ピントリッキオ
《隠遁生活を送る聖ベルナルディーノ》

フランチェスコ会 VS ドメニコ会

【図4】フィリッピーノ・リッピ
《聖トマス・アクィナスの奇跡》



一例を挙げると、ふたつの画面【図3、4】には、○物語の主演である聖人、○それを指さす背中を向けた青年、○ターバンを巻いた異教徒を含む、聖人を見習うべき群衆という同じ構成要素が確認されます。また【図3】には、フランチェスコ修道士シエナの聖ベルナルディーノの美德を目指すべき群衆のひとりとして黒いフードを被ったドメニコ会修道士【左上】が描かれています。一方、カラファ礼拝堂壁画の《聖トマス・アクィナスの勝利》という主題には、「三位一体」に異を唱えた異端者たちが登場し、彼らの主張を非難する銘文が書かれています。史料によると、ドメニコ修道会士たちは、シエナのベルナルディーノが説教において、「三位一体」の教義に背くような発言をしていたと繰り返し糾弾していました。

欧米を中心に研究がつくされてきた両礼拝堂壁画について、その関連性をはじめて指摘できた背景には、発表者が欧米の美術史教育から地理的・心理的に離れた場所で研究の基礎を築いたという背景が少なからず影響しているように思われます。ジョルジョ・ヴァザーリによって16世紀に著された『美術家列伝』は、公刊を意図した史上初の体系的な美術家の伝記集であり、イタリア・ルネサンス美術史研究において第一級の一次史料ですが、フィレンツェの美術官僚でもあった著者ヴァザーリがそのなかで提示したフィレンツェ美術至上主義的思想は今もなお強く根付き、とりわけ欧米の研究者たちにとっての「神話」となっているように思います。その状況下で、ウンブリアの画家ピントリッキオの芸術成果にフィレンツェの画家フィリッピーノが感化されたかにも見える影響関係は、彼ら（特にフィリッピーノ研究者たち）にとって、意識的もしくは無意識的に目を背ける傾向が生み出されていた感が否めません。本書での提案は、この先入観に対して比較的客観的な立場をとりうる研究歴を有した者ならではの視点であり、執筆を通して、西洋美術史という分野に日本人として参画する意味を見出すきっかけとなりました。